

近代ヨーロッパ・ヒューマニズム成立過程の研究 —16～18世紀のイギリスの事例から—

A Study on the Formation Process of Modern European Humanism — Around the Cases in England from the 16th Century to the 18th century —

平賀 明彦

はじめに

これまでヨーロッパ・ヒューマニズムの成立過程とその特徴を探究してきた¹⁾。14、15世紀、イタリア・ルネサンスに端を発し、その思潮がアルプスを越えフランスに流入し、さらに洗練されたものとして磨きがかけられ、内実を豊かにしつつ、ドイツの文化、思想に影響を与える形で流れ込み、ほぼ17、18世紀に一つの完成型を作り上げると考えられるのである。レッシングの市民劇にはじまり、ゲーテ、シラーの文学、あるいは当代の彫刻、建築などの芸術、文化の数々は、まさにその典型であり、それまでの変遷の集大成としての成果を如何なく発揮していた。そして、まさにそのルートを経巡る過程の中で、ヒューマニズムは、自らの精度を高めるとともに、幅広く、ヨーロッパ大陸の思想・文化に影響を与え、中世から近代への移行過程を領導する基軸的な役割を果たし、ヨーロッパ近代思潮の主潮流として、その裾野をさらに広げて行ったのである²⁾。

このように、これまででは、そのプロセスの時々の実情、各地域での実態を、時間の流れに沿って明らかにすることによって、ヨーロッパ・ヒューマニズムの全体像に迫ろうとしてきた。そして、それはまさに、ルネサンス期イタリアを出発点に、中世封建制の超克を目指してスタートを切った、ヨーロッパの近代化過程そのものであった。そして、その際克服すべきものとして対象化されたのは、王権の下に多くの人々を従属させるために機能した封建諸侯の力による、土地所有を仲立ちと

した強固な支配構造であり、身分的差別を社会秩序の柱として支配—被支配の関係を盤石のものにしていた社会構成の在り方であった。荘園制を根幹に成り立っていたその支配構造を、徐々に切り崩しながら、身分的従属関係を次第に克服し、社会的、政治的発言権を強めていったのは、これまでの検討でも明らかなように、新しい経済活動の場を、自らの力で切り開き、開拓していった新興の商工業者たちであり、そこで、自らの経済力を高めていった彼らは、都市に結集し、その経済力に見合った権利が与えられることを求め、これも時間をかけながらであるが、僅かずつ歩を進め、獲得するものを増していったのである。

そのような過程が進む以前、一千年以上の長きにわたってヨーロッパ社会を覆っていた封建制は、土地所有関係に代表される経済の基本的仕組みを、精神世界の面でキリスト教が補完することで、社会構成としての強固さを維持していた。絶対的神の存在は、信仰を通して人々の心に定着し、その教えとして提示された秩序への絶対的服従を求められることによって、体制的な安定性に結果することになった。神の絶対性への敬虔な信仰は、支配—被支配における構造的矛盾を覆い隠し、その維持のために整えられた秩序に対する、無限定な承認を強いられ、王権を頂点とするピラミッド型の支配構造への服従に結びついて行き、中世世界を揺るぎないものとして位置付ける結果をもたらした。

イタリア・ルネサンスを起点に、このような体

制へのアンチテーゼが掲げられ、人々の心をつかみながら、それが多様な方向から提示されることで、このような封建的な仕組みも揺らぎを生じることになるのだが、その一つのきっかけは、先述したように、封建的土地所有制の解体とそれにもなう身分制秩序の改編であった。その原動力となった都市の新興勢力の台頭が、社会、政治の仕組みに多大な刺激を与え、それが強固な身分秩序の下に緊縛されていた他の被支配勢力の発言力にも力を与えていった。また、他面では、そういった動きのよりベーシックな部分で、とくに、この時期の自然科学の急速な発展が重要な契機になっていたことも間違いないだろう。

ガリレオ・ガリレイを代表に、この頃の自然科学の長足の進歩は目を見張るものがあり、それらは、人々の生産活動や日々の生活に直接影響を与え、生産力アップ、物流システムの改良、そしてそれらの結果として人々の日常生活の改善といった成果を生み出して行った。そして、それは人々の意識構造の上でも大きな転換のきっかけになったと言える。自然科学の発達は、あらゆる事象、そしてそれらの積み重ねとして私たちの前で展開している現象には、すべて理由があり、それは理論的に説明できるものであるということを実証的に提示した点で重要であった。物事の本質を見極めることの意義と可能性を人々に説得的に提起したのであって、事象をもたらし原理や現象を生み出しているメカニズムとそれらが蓄積されて行く時の法則の発見は、人々のそれまでの判断基準とそれに基づく価値観に大転換をもたらした。すなわち、神の名の下に、神秘主義のベールに覆われながら、本質が見極められていなかった多くの事象、現象が、合理的に説明され、法則性すら見出されることも決して少なくないことが判然とする中で、神の世界からの離脱は必然的に加速されていくことになった。しかも、それらの理論的展開が、実験という方法を用いて実証されたことの意味は大きく、確かさに関する信頼が、事実を受け入れることをより速めて行くことになり、この転

換は瞬く間に人々の間を席卷していった。

このような価値観の変化は、目の前の自然現象や物理的、化学的成果といったことに限られたことではなく、自分たちが日々生活し、また集団を営んで日常を送っている社会の仕組みや秩序意識の在り方にも当然影響を与えて行くことになる。そもそも神の絶対への疑問が生じており、しかもそれを指し示す実例が目の前に説得的に繰り広げられる中では、絶対的神を基軸に成り立っていた、これまでの社会体制や支配—被支配への疑問、あるいはその正当性への合理的説明の要求が生まれてくることは必然であった。そのような中、それでは人々は、あらたな価値基準をどのような存在に求めようとしたのだろうか。それは、自然科学の急速な発達を担い、それを実際の生産や生活の改善に結び付けている、まさにその担い手である自分たち、すなわち人間の存在への関心の高まりとなっていたのである。新しい時代を切り開こうとした時、忌まわしい前時代、すなわち中世は範たり得ないのはもとよりで、人々は、それを中世以前の時代、すなわち古典古代に求めようとしたことも、神から人間への視点の移ろいに影響を与えたことだろう。

近代ヨーロッパで、人間中心的な視座が成立し、その存在を重視し、意味づけようとする取り組みが盛んになり、また、その人間の感性の発露として、さまざまな形で表現される芸術的活動について、その成果を讃え、高い評価を与える動きがあちこちで昂まっていったことも確認できることである。それらを総体として見た時、ヒューマニズムがこの時期、時代の主潮として広がりを持って展開し、人々のあらゆるものの評価軸の根幹となって機能していた事実が明らかとなる。これまでの幾編かの論稿では、その足跡を追いつつ、イタリアを起点に、フランス、ドイツと実証を重ねてきた。本稿では、その流れの中で、常に一定の影響を与え続けていたと思われるイギリスの事例について検証を試みたい。

ヒューマニズムの精神が、14、15世紀から17、

18世紀にかけて、地続きのヨーロッパ大陸に広がっていく中で、ドーバー海峡を隔てたイギリスは、どのような動きを示していたのだろうか。その実情を明らかにすることで人間中心の考え方が広まって行く過程を辿るとともに、とくに社会全体の中での個の存在がどのように位置付けられ、その意味が追求されて行ったかに焦点を当ててみたい。

すでに述べたように、この時期の発想の大転換のきっかけは、自然科学の発達にあり、物事の本質を見極めるためには、科学的実証による分析、合理的判断が必須であることがその前提になっていた。そしてそれは、人間心理や社会現象を解き明かす上でも同様であり、とりわけ、分析対象の解析において、それを個のレベルにまで踏み込んで焦点化することの重要性が強調された。すなわち、対象物を構成している諸要素の根源、原子を突き詰め、その分析に踏み込むことが重要とされたのである。この原子論的な解析手法は、心理探究や社会科学分析にも適用されることが多く、例えば社会の仕組みや制度の分析においても、基本手法として個のレベル、つまり個々の人間を対象に解析が積まれる傾向を生んだのである。

『ユートピア』の世界

16世紀初め、オランダのアントウェルペンにいたトマス・モアは『ユートピア』の執筆を進めていた。20年後、反逆罪で断頭台の露と消える運命にあったこの人文主義者は、この時、30歳代の後半。この後宮廷に召され、法律家としては最高位の大法官に上り詰めるまでにはもう少し時間を要したが、ヘンリー8世の信頼と手厚い庇護のもと、当時の法曹界の重鎮としての役割を果たしていった。しかし、宗教改革の激変の中、あくまでカトリックが唯一の正当なキリスト教であると唱え、ローマ教会からの分離に徹底して反対し続けたために処刑されることになったのである。若い頃、エラスムスと出会い、生涯の深い親交を結んだが、エラスムスの『愚神礼賛』は、ロンドンのモアの

家で書かれたと言われている³⁾。

モアの名を高からしめ、イギリスのヒューマニストとして評価されることになった『ユートピア』⁴⁾は、理想郷を描くことで当時のイギリス社会や諸制度を批判する形をとっている。その理想郷では労働時間は6時間と設定され、身分に当たるものもなければ、男女の違いも想定されていない。例えば、6時間の労働には性別に関係なく皆が従事するのである。そのような中で、人々は安息の時間を満喫し、満ち足りた思いで日々の生活を営むのである。まさに、人間の幸福を土台に築かれた理想社会であり、ヒューマニスト、モアの姿勢が映し出されている。

モアはこの書の中で、理想社会を描くことで、貧富の差が歴然とした現実社会の在り方、そしてそこで常に虐げられ、正当な保障が与えられていない社会的弱者の存在に目を向け、そのような状況を許している当時のイギリスの在り方に痛烈な批判を浴びせていたのである。当時、新興の地主たちが大量の土地を囲い込んでいた、いわゆるエンクロージャーにも批判的であったモアは、そういったことの犠牲となることが多い、社会の底辺にいる人々へのしっかりした目線を持っていたと言える⁵⁾。このユートピアは、人々の出入りは完全に自由であり、人々の健康を守り維持するために病院が完備されていた。また、戦争は否定され、コモン・ウェルズあるいはパブリック・ウィールと称される共和政体が成立していた。犯罪を犯したものを対象に奴隷制が認められていたことなど、一部に不完全な部分は持ちながら、まさに理想とされた社会、国家が提示されていたのである。そして、そこでは、その社会を構成する一人一人の個人が、明確に措定され、その集合体として規範と秩序を備えた組織体が設定されていたのである⁶⁾。

個人主義の萌芽

16世紀から17世紀に入る頃のイギリスは、絶対王政の終焉期であり、王政と共和制が凌ぎを削っ

て対抗関係を深める中で、次第に議会の勢力、すなわち共和主義の考え方が優位を占める形勢が整えられつつあった。

ピューリタン革命に反対の姿勢を示していたスコットランドは、チャールズ1世の事実上の嫡男、後のチャールズⅡ世を王として推戴することを決め、戴冠式を挙行了。17世紀の半ばのことである。しかし、クロムウェル率いるイングランドにウスターの闘いで敗退、国外に身を移したチャールズは、フランス、オランダを経てドイツに至り、その地で亡命政権を打ち立てた。その後、イングランド国内の政権が動揺した混乱状態に乗じて、スコットランド軍が巻き返し、イングランドに侵攻、議会を解散した。その後の選挙で多数を占めた王党派はチャールズを招聘、スコットランド王チャールズⅡ世として即位させた。

チャールズⅡ世治下のイングランド議会は、終始王党派が主導権を握り、長期政権を維持、継続した。しかし、英蘭戦争やペストの流行、ロンドンの大火などにより財政が悪化し、その対処法を巡って王と議会の対立が生まれ、オランダ軍のロンドン侵攻などが起こる中で、その修復は難しい状況となった。その立て直しを図るために、フランスとの関係を深めようとしたチャールズⅡ世は、ルイ14世と軍事的連携に関わる密約を結び、またその条件の一つとして、自身と後継者ジェームズのカトリックへの改宗を約すなど、議会との関係をさらに悪化させる道に踏み込んでいった。その結果、第3次英蘭戦争で敗退を続けただけでなく、その戦費調達のための財政運営でも失政を繰り返し、大きな経済混乱を惹き起こした。そのため、非国教徒の処遇を巡って議会の要求を入れざるを得ず、また貿易再開を望む議会の声に押されてオランダとの戦争を打ち切るなど、議会の要求に屈することが増えていった。

また、自らの後継をめぐっても議会との間で軋轢が生まれ、また議会そのものも紛糾することになったが、それは、後継候補となったヨーク公ジェームズのカトリック信仰の問題であった。議

会内もヨーク公を推戴する一派と、プロテスタントのモンマス公ジェームズ・スコットを擁立しようとする一派が相争う混乱状態となり、それぞれがトーリー党、ホイッグ党を名乗って、後の保守、自由の二大政党制の基本が出来上がって行った。

国内政治がそのような動向を辿っていた頃のイギリスの思想史的状況はどのようなものであっただろうか。ヒューマニズムの観点で、トマス・モア以後の様子を辿てみると、16世紀の終わり頃から翌17世紀の初めにかけて活躍したホッブズに注意を惹かれるだろう⁷⁾。社会契約論の先駆者として、近代的政治哲学を理論化する基礎を築き上げたホッブズは、ガリレイ、ベーコン、デカルトなど当代きっての知識人、科学者たちと親交が深かったことでも知られている。ピューリタン革命前、絶対王政の支持者と目されたため、難を逃れ亡命していたフランスで『リヴァイアサン』⁸⁾を執筆した。

この大著について紹介することは紙数の関係上難しいが、ここでテーマとしている課題に引きつけて、ホッブズの論点をまとめておこう。その際、まず大前提として、人間はその本性から言って利己的な存在で、それ故に他者との関係性にあっては、常に自己を守ることが許される存在として規定される。このように自らを守るとは、個々の人間に当たり前のものとして保障されており、それ故自然権として理解することができる。そして、そのような自然権を備えた人間が集合して社会を構成している状態が、すなわち自然状態であり、そこでは人間はすべて平等であるが、一方で、互いの自然権が衝突し合う闘争の場でもある。その「万人の万人に対する闘争」状態を回避するためには、それぞれの利己的な部分を調整し合う約束ごとを交わすことが必要であり、それが社会契約であると説くのである。

ホッブズにおける人間は、このように自己保存の権利を有する存在であり、その意味での平等性が強調される⁹⁾。しかし、科学的手法による解析の中では、人間の個的な存在は捨象され、自己保

存の自然権を所有することのみに注意が払われる中で、人間の社会的営みとか相互扶助の在り方などには目が向けられず、分析の対象としても取り上げられないのである。それは、人間個々が備えている個的特性といったようなことについても同様である。このように、自己保存の自然権のみに焦点を当てると、人間は同等の存在と見なされることになり、人間がそれぞれ取り交わす関係性といったものは副次的なものと位置づけられることになる。このような捉え方は、ホッブズの科学的個人主義と称され、後の人間観にも影響を与えることになった¹⁰⁾。

ここでテーマとしているヒューマニズムの生成過程との関係では、以上のようにホッブズの人間観とりわけ、個としての人間の存在、そして、そこに自然権を措定し、その権利を有することで同等である人間の平等性が強調されたことに特徴があった。今、私たちは、ヒューマニズムの精神の大きな柱として、個の尊厳が重要な位置を占めていることを知っている。そして、ホッブズの所チャールズⅡ世、そしてその後を継いだジェームズⅡ世は、ともに専制的政治を展開し、そのため、政治状況としては、議会との絶えざる緊張関係が常に胚胎されていた。二人の王政の時代は、清教徒に対する抑圧も厳しいものがあり、これに対抗するために議会は行財政全般にわたって国教徒が主導権を掌握できる体制を固めていった。また、人身保護に関しても力を注ぎ、逮捕拘禁や裁判などで個人の自由が奪われることがないよう法的环境を整えた。しかし、チャールズⅡ世を継いだジェームズⅡ世の専制は、議会との対立を生み、とくに、カトリックに傾斜した施政の在り方はプロテスタントの離反を招くことになった。カトリック教徒が政府部内の高官となり、また宮廷の高位の役職に就くことを承認した。そして、その一方で、要職にあった国教会信徒を免職するなどしたため、議会との緊張関係は高まっていった。その結果、1688年、ジェームズⅡ世が、カトリック擁護の政策に反対したカンタベリー大主教らを

逮捕・拘禁したことをきっかけに、ホイッグ党急進派は、オランダのオレンジ公ウィリアムを迎え入れ、ジェームズⅡ世を王位から追ったのである。この名誉革命によって、王権は著しく衰退していくことになる。この名誉革命の行程とその結果を肯定し、正当化しようとして執筆されたのが、ジョン・ロック¹¹⁾の『統治二論』¹²⁾であった。ロックは、ここでホッブズの遺産を引き継ぎ、人間の自然状態に着目し、そこにおける自然権に思いを致し、人間の本質理解の前提に据える点でまさに正しく継承する姿を鮮明にしていた。しかし、ホッブズがその自然状態における個々の自然権の保障が、人と人との関係における衝突を生み出すとの出発点から立論したこととは違い、そしてまた、ホッブズが個の特性に注目しつつ、その集合体としての社会的存在としての個と、そのそれぞれの関係性について、必ずしも視野におさめられていなかったのに対し、ロックは、より積極的に社会的まとまりとの関連で、個をとらえようとした点に特徴があった¹³⁾。

ロックは自然権を有する個々人が生を全うしている中で、それぞれの個の関係性が重要なので契約を取り結び、社会を構成すると考えるホッブズに対し、自然状態にある人間は、その社会契約以前に、自然法に規制されていて、そのことが社会関係を形作る際のより重要なポイントであることを強調する。そして、その自然法とはつまり人間理性に沿った行動様式であり、それは人間の歩むべき道を理性が指し示していることから説明できるとするのである。ロックによれば、自然権を有する個人は、その意味において誰にも差はなく、すなわち平等である。そうであるならば、ある個人の自然権が完全保障されると同時に、別の他者の自然権も同様に保障されなければ平等性は根拠を失うことになる。そのように、他者の自由な行動や、幸福を求める気持ちを、自分のそれが正しく保障されるように保障しなければならないという判断、それを行うのが人間の理性であるという考えである¹⁴⁾。この自然の理法、すなわち理性が、

人間個々の有する生命、財産、自由などの侵害を許さないきまりの源であり、それは人間すべてに平等に備わっているものなのである。ということは、その平等性を損なうような行為がなされた場合は、それは罰せられる対象となることを意味している。人間が他の人間に罰を与えられるのは、それぞれの自然状態を侵害するような行為が行われ、本来の平等性が損なわれるような事態が生じた時に限られるということになる。そして、それは人間一人一人に備わった自然権に由来する明確な権利として位置付けられるのである。

ところが現実的には、人間には諸々の特性があり、それはともすれば、物事に対する理解力の差や、対応能力の違いとなって顕現する。その個的な差を了解し合い、相互に補完しながら社会を営んでいくために、神は人間に「悟性」と「言語」を与えたとロックは説くのである。

ロックの『統治二論』は、当時の王権の絶対性の根拠になっていた王権神授説を徹底して論駁する第1論と、先に示した社会契約説を土台に、自然法的な人と人の在り方を説得的に語る第2論とで構成されている。第2論では、人間の所有権について定義づけられ、それを労働に求めようとする労働価値説がすでに提示されていた。そして、それを含めた自然権が阻害されるような事態には抵抗する権利があり、また必要に応じ制裁を加えることもできるなどとして、自然法に基づく人間存在を保障するルールとともに、社会の、そして国家の果たす役割にもその言説は及んでいた¹⁵⁾。そこでは、あらためて社会契約の必要性が強調されるが、しかし、社会に権限移譲して、その構成員個々の自然権の保障を得るためには、個々に有する諸権利全てを委ねてしまうホッブズのようなやり方ではなく、法の執行に関わる権利のみで事足りると主張するのである。

そのため、実際に目の前で展開しているスチュワート王朝の絶対王政は認められるものではなく、ロックは、その専制主義に強く反発したのである。そして、その理由は、角度を変えると、ロッ

クの権限移譲のシステム構想が、多数決原理に軸を置いた民主主義の確立と不可分だったからである。自然法状態で、個々の自然権に属する諸権利の保障が果たされるためには、社会がそれを達成することに皆が同意を与えなければならないが、現実的には、数多の中から、実際にその執行を司る一定の集団が担う場合が想定される。そして、その一定の集団に執行を委ねるとしても、正しく進められることへの確信は得られない。また、そういった集団が複数並立して、どこにその任を委ねるべきか判断に苦しみ場合も想定できるだろう。こういった実際に起こり得る契約上の問題の在り方に対し、ロックは、多数への付託をもってその解決をはかろうとする。すなわち委任すべき集団の中でも多数を占めるまともに、主として付託することが間違いのない選択になるだろうと結論するのである。かなりシンプルな議論ではあるが、確かに権限移譲の選択肢としては、差し当たって有効性があり、説得力ある考え方ではあるだろう。そして、また、ここに民主主義的手法の第1の原則が貫かれていることも確かであり、そのため、考え方の妥当性という点で理解を得ることができたのだろう。実際に、多数が他の意見を律して、全体を牽引できなければ、社会は混沌に陥るだろうという考えそのものは、なかなか有効な反駁を許さない単純明快さをもっており、多くの場合、社会の決定はそのようにして具体化されていたと言えるだろう。その場合、社会の決定は市民の信託に基づいて履行されるのであるが、そこで市民の意思に沿わないことが行われた時は、市民には抵抗する権利があるとロックは説いていた。この抵抗権の発想は、後のヴァージニア権利章典などに反映され、後代に引きつがれて行った。

理性と感情、倫理と情念

観念の源は何で、それを解き明かすことによって見いだされるであろう真実は、どのような可能性を人間にもたらすか。こういった問題関心から発したイギリスの経験論は、そもそも哲学的基礎

を人間経験の裏付けに求めることで成り立っており、それゆえ、そこで方法的に重視されるのは、合理主義に根ざした根拠立てであって、まさにロックが強調したように、人間の心は元来白紙の状態であり、外からの刺激による経験、とりわけ感覚と反省によってその中身が獲得されていくとされた¹⁶⁾。この「磨いた板」(タブラ・ラサ)に書き込まれて行く経験が知識の源泉とする考え方は、少なくともその白紙状態については、すでにプラトン、アリストテレスによって提起され、中世においては、トマス・アクウィナスも取り入れていた。もっともその際は、知識はそもそも天界にあって、生れ落ちる時に宿るとされていたのだが。

このような系譜を辿るイギリス経験論の積み重ねは、ロックからバークリーに継承され、「存在は知覚されること」¹⁷⁾との定義付けにより、知覚によってもたらされる観念の結合・一致・不一致・背反が知識であり、あらゆる観念と知識は、経験によって獲得できることが強調された。

知の存在を重視し、その源泉を見出そうとするこの思索の在り方が、そもそも人間というものに焦点を当て、その価値をより前向きに、積極的に判断しようとする考えの現れであり、まさにヒューマンイズムの原点とも言える営みであったことは間違いなく、16世紀から17世紀のイギリスでは、経験論を基礎にこのような探究が深められていったのである。

しかし、主観的観念論と呼ばれ、あるいは独我論などとして批判されることもあったバークリーの所論は、彼が聖職者であったこととも関係して、物質の否定と、その一方で知覚する精神と神の存在のみを実体としてとらえようとする姿勢となって現れ、中世的な視点を引きずりながらの人間観という側面を持っていた。

この時代が自然科学の長足の進歩によって特徴づけられることは既に指摘しておいたが、その際の探究の基本は、物事の本質を、その大本まで遡及して明らかにすることにより解明して行こうと

する態度であった。この原子論的発想は、自然科学のみならず、社会の特徴やその構成員である人間の本質を見極めて行こうとする時にも当然取り入れられた。ロック、バークリーと引き継がれてきたイギリス経験論が、個の存在に着目し、その知的営為に分析のメスを入れ、本質理解に近づこうとしたのは、まさにその現れであった。そして、このような系譜を引きながら、さらにその深奥に分け入ろうとしたのがヒューム¹⁸⁾であった。

ヒュームは、人間の本性は確実な知に必ずしも到達することが出来ないとする懐疑的なスタートラインから探究を始めたところに特徴があった。もとより、知覚によって得られた観念が知識の源であるという、これまでの経験論の基本は正しく継承しつつ、しかし、人間の知や経験論そのものに一定の限界を設定する必要があることを力説したのである。もとより、その懐疑的姿勢は、彼の所論全面を覆っているものではなく、その一部、とりわけ、ある出来事と他の出来事との間の因果関係があるのとらえることが必ずしも正確ではないという認識でそれは強調される¹⁹⁾。つまり、二つの出来事が結び結ぶ関係性については、人間が経験的にその間につながりが存在するように理解することで、習慣的に身についた認識であって、そこにおける必然的な因果関係は人間の心の中に育ったもので、実態を映し出しているわけではないと考えるのである。

このような考えの根本には、ヒュームの感情主義とも呼ばれる独特の立場があったと言える²⁰⁾。ヒュームは、これまでの人間観の基軸を為していた理性中心主義から距離を置いた立ち位置から出発していた。感情や欲望を理性によってコントロールしつつ、自らの行動を律し、行くべき道を選択している人間の活動様式、その倫理観をこれまでの哲学は自明のこととしていたが、その点でヒュームは立場を異にしていたのである。彼にとっては理性は感情の奴隷であって、倫理は情念から生まれるものであった。そして、その基本に立った時、人間と人間の取り交わす相互関係に関

する認識の在り方も、これまでとはことなった角度から見直すことになる。集団の中のある人の心に情念が宿り、それが言葉や態度となって表徴され、他の人々に伝えられて行く。それを受け止めた他の人がその情念を理解することで共感が生まれ、そのことにより本人と他者の間の関係の中に倫理が育まれると考えるのである。人間の集団の中での共感、倫理性はこのように感情の受け渡しによって成り立ち、相互の連関を生み出していく原動力となると主張するのである。主著『人間本性論』などで展開された、ヒュームのこのような所論は、社会の構造分析にあつては、社会契約説を否定する立場につながり、法も共通の利益を欲するという感情の産物として、社会生活の必要に応じて生み出されたものと解されるのである。そして、人間を生来社会的存在として位置付けることによって、社会や国家についても、恣意的に拵え挙げられたものではなく、そもそも必然的に存在するもので、社会的効用と社会を構成する人間の個々の個人的効用とが背反しないように便宜的に作られたものとして捉えようとするのである。この発想の基本となっている、感性に裏打ちされた個的存在としての人間の在り方、そこにおける個人主義は、以後、色々な形をとりながらであるが、イギリスにおける哲学的営為の基軸として作用し続けたと言えよう。

正邪、善悪そして苦痛と快楽

その観点で、この基本線のその後を追ってみると、それは18世紀に入つて、ベンサムによって、より緻密に解析され、また論理化が果たされていったことがわかる。

ベンサムにあつては、その起点は、この時期の科学的進歩に由来するものであつた。彼にとっては、社会を分析対象に据えた研究にあつても、定義できない曖昧なものは許されず、また、そのことの実証性から言つて、定量化できないものは認められなかったのである。これが科学的分析の基本だったわけである。そしてそれは、社会の、そ

してそれを構成する人間の本質理解においても同様であつた。人間理解の基礎は正邪、善悪の判別由来するが、しかし、それらは絶対的なものではなく、相対的であるとともに、また結果論的であつて、行動そのものでは判定できず、意志ですら決定的な判断の材料を提供し得ない。その決定は、一にかかつて、それらの結果が何をもたらしたかによって決まると説くのである。言い方を換えれば、人間は、生を受けるとともに与えられた苦痛と快楽によって支配され、そのどちらかによって幸福か否かが決定される。そして、それは意志ある行動の如何によって決まるのではなく、あくまで行動の結果として何が得られたかによって定まるという主張である。そして、それだからこそ、ある行動の価値評価は、その結果が、そこに関わる人間の幸福を増大するか、減少するかによって判定されるべきで、つまり「効用の原理」が判定材料を提示するというのである。

このように人間の個的存在の上で「効用の原理」によって幸福の度合いが判定できるとして、それを人間の集合体である社会、国家に適用していくとどうなるか。ベンサムはそれに応えて、「最大多数の最大幸福の原理」を主唱したのである。

この時代、自然科学の長足の進歩が、学問研究全体の発展を領導し、人間、社会の解析においても大きな飛躍のきっかけとなつたことは既に述べた。ベンサムにあつても、この苦痛と快楽の判定に当たって、科学的手法を駆使することが重要と見なされ、とくにその幸福の度合いを定量的に定めようとする以上、その方法が問われなければならないのは自明であつた。彼は、まさにその意識を明確にもち、実際に、適用すべき方法の前提について提起していた。すなわち、対象となる人は必ず一人であつて、身分、役職等で一人以上にカウントされたり、それ以下に見なされることがあつてはならないとした。また、苦痛、快楽は、それがどのようにもたらされ、また、どのような質のものであるかに関わりなく、全て同質であることが重要とされた。これらには、当代に在つて

成立をみた人間存在についての平等感、公平感といったものが裏打ちされていたことがうかがえるが、もちろんそのみでなく、幸福の量を問題にし、それを科学的に測定できるという前提にたった立論にあっては、このような分析の基礎が明確にされることが必須だったのである。

ベンサムはこのように、人間の個的存在における最大幸福の追求、そしてそれらによって構成される社会の幸福追求の在り方を提示しつつ、施策的提言やあるいは社会、国家の在り方を示す指針について言及して行った。しかし、自然状態の人間における、苦痛と快樂の度合いによって、幸福か否かは決定するとして、社会、国家は当然それをより良く達成することを目指し、構成員一人一人の個的利益との調和を保ちつつ、その目的に向かって社会、国家が構成されるのはむしろ当たり前のことで、それこそが自然状態で、その移ろいに任せられるべきものという点を重視していたことも確かであろう。そこに、ベンサムの一つの特徴があり、いわゆる自由放任主義として位置付けられるのはそのような側面であった。そして、この考え方は、社会、国家と構成員たる個人の存在の関係性について重要な提起を含んでいたことで、後代に大きな影響を与えていくことになる。

すなわち、社会、国家の規定的要因が少ない構造は、つまり構成員個々の自由の保障と関係しているものであって、政治的、法的、あるいは経済的自由の在り方に深く関わっている。長きにわたってヨーロッパを覆っていた中世の世界は、大土地所有制を基底とした強固な身分制によって特徴づけられた、その意味で、経済的、政治的自由の制限された社会であった。今、まさにその原理が内部的に崩れようとしているこの時期にあって、市民的自由の獲得に結び付く要素は、時代の先行きを見通す上でも重要な手がかりを提供することになったと考えられる。

まとめにかえて

16、17世紀のイギリスの思想史を、人間観の変

遷という観点で眺めてきたが、とくに後半では個人主義の成立といった捉え方でそれを特徴づけることが出来そうである。ロックからヒュームを経て構造的な感性を見出していくイギリス経験論の流れは、個人主義としての特質を持ちながら、またベンサムにおける「効用の原理」そして、「最大多数」「最大幸福」という、ある意味で究極的な目標設定に結びつく一つの到達点に辿り着く。この過程には、明確な前進が読み取れ、とくに人間の存在そのもの、あるいはその個としての特質を見極めようとする姿勢が、その集合体としての社会の在り方や国家観に展開して行く広がりを持った進み方を見出すことが出来る。

実証的な視点から、ここでは「ユートピア」を起点に、現実世界の人間観、そしてそれらによって構成される社会の構造的性質という、対象の広がりとともに、社会性を本質とした人間の特性を明らかにしようと積み重ねてきたイギリスでの取り組みを明らかにしてきた。もとより、このような流れをトマス・モアを起点に説き起こすことには無理があり、さらにその前史を辿る必要があるが、ここでは紙数の制約上触れることができなかった。また、十分取り上げられなかったという意味で、差し当たって二つの点で課題を残してしまったと考えている。その一つは、論証に当たって、17世紀、ベンサムで一つの区切りを付けざるを得なかったことである。人間理解のための分析の積み重ねが、個人主義に焦点を当てた思想形成の歩みとして辿れるところに、イギリスの特徴があると思うが、もとより、その道程はさらに、その基本線を維持しながら継続されて行く。とりわけ、その流れの中では、スチュアート・ミルとスペンサーについては言及して置かねばならなかった。また、これらの積み上げの中で、ダーウィンの進化論が与えた決定的な意味も見逃すことはできず、その影響をどのように位置付けるかを含め、あらためて稿を起こして検証を継続して行きたい。

もう一つの課題は、それら爾後の分析を加えつ

つ、イギリスにおける人間理解のこの流れが、ヨーロッパ大陸におけるヒューマニズム形成の道筋とどのような連関を持っていたかについて明らかにすることである。大陸での様子も、イタリア、フランス、ドイツと各国史的に取り上げて来てしまったが、そこには、時代を経る中で、ヒューマニズムが形を成し、内実を豊かにして行く経過と照応するものがあり、それなりの必然性をともなっていたが、イギリスにおけるそのプロセスは、必ずしもそれと軌を一にするものではなかった。しかし、ドーバー海峡を隔てた距離ではあるが、イギリスと大陸には、歩調の合った部分と、また、それぞれの独自性が発揮された側面があったと思われる。それぞれの相互関係を意識した検証を行い、どのように影響し合っていたのかを解明する必要があるだろう。

それらの課題を果たしつつ、イギリスを含めたヨーロッパにおけるヒューマニズムの生成、成立、発展のプロセスをトータルな視野でまとめ直し、成立史として全体像をとらえ直して、その特徴を跡付けることが、現代ヒューマニズムの特質把握と、その現代的意義を考察する上で重要であり、最終的に成し遂げるべき課題であると考えられる。

注

- 1) 拙稿「現代ヒューマニズムの淵源を探る—15世紀イタリア・ルネサンス絵画を素材として—」白梅学園大学・白梅学園短期大学教育・福祉研究センター「研究年報」19号 2014年8月。拙稿「近代ヒューマニズム成立の時代背景とその特徴—17、18世紀のドイツを事例として—」白梅学園大学・白梅学園短期大学教育・福祉研究センター「研究年報」20号 2015年8月。
- 2) ヒューマニズムを対象とした先行研究はかなりの数に上るので、ここですべてを取り上げることはできないが、比較的研究が集中した1950年代を中心に代表的な文献を掲げて置く。日本ヒューマニスト協会編『現代ヒューマニズム講

座 20世紀のヒューマニスト』宝文館出版 1956年、務台理作・谷川徹三・他監修『現代ヒューマニズム講座現代ヒューマニズムの諸問題』宝文館出版 1969年。また、ヒューマニズム研究のもう一つのピークと思われる。20世紀末の一連の文献としては、やはり代表約なものを挙げれば以下のようなものがある。すなわち、ハイデッガー／渡辺二郎訳『「ヒューマニズム」について』ちくま学芸文庫 1997年、福井一光『ヒューマニズムの時代—近代的精神の成立と生成過程—』未来社 1989年、村瀬裕也『教養とヒューマニズム』白石書店 1992年、深沢賢一郎『ヒューマニズムの現在—混迷の政治の中にいる私—』郷土出版社 1995年、竹田宏『ヒューマニズムの変遷と展望』未来社 1997年、都留重人『科学的ヒューマニズムを求めて』新日本出版社 1998年。

- ここで分析の対象としたイギリスについては、ヒューマニズム論との関係だけでなく、近代史の基本的な流れを押さえるために以下のような文献を参考にした。今井宏編『世界歴史大系 イギリス史2—近世—』山川出版社、1990年。友清理士『イギリス革命史（上）』研究社、2004年。浜林正夫『増補版 イギリス市民革命史』、未来社、1971年。今井宏『クロムウェルとピューリタン革命』、清水書院、1984年。友清理士『イギリス革命史（上）・（下）』研究社、2004年。スティーブン・ピンカー著『人間の本性を考える—心は「空白の石版」か』山下篤子訳、NHK出版、2004年。
- 3) 池島重信「イギリスの個人主義思想」務台理作・谷川徹三・他前掲書。
 - 4) トマス・モア／平井正穂訳『ユートピア』岩波文庫
 - 5) オーブリー／橋口稔・小林圭訳『名士小伝』富山房百科文庫 1979年。
 - 6) 池島前掲論文。
 - 7) 田中浩『ホップズ』清水書院 2004年。
 - 8) 長尾龍一『リヴァイアサン—近代国家の思想

と歴史』講談社学術文庫 1994年。

9) 池島前掲論文。

10) 田中浩前掲書。

11) 大槻晴彦訳『世界の名著32ロック ヒューム』
中央公論新社 1999年。

12) 加藤節訳『完訳 統治二論』岩波文庫 2010
年。

13) 池島前掲論文。

14) 大槻前掲訳書。

15) 加藤前掲訳書。

16) 池島前掲論文。

17) 池島前掲論文。

18) 大槻前掲訳書。

19) 大槻前掲訳書。木曾好能訳『人間本性論／知
性について』法政大学出版局 2011年。

20) 池島前掲論文。木曾前掲訳書。